

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2018年 2月

「恐れるな、小さい群れよ」「創造-わたしたちの嗣業(1)」「このお方に栄光を帰せよ」「白菜のキムチ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

創造 - わたしたちの嗣業 (I)

4

聖書の教え

朝のマナ

恐れるな、小さい群れよ

7

Fear Not, Little Flock

現代の真理

「永遠の福音」

36

このお方に栄光を帰せよ

力を得るための食事

セリと大根のサラダ

44

お話コーナー

「良い羊飼いの (I)」

46

イエスの物語

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話：0494-22-0465

FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール support@4angels.jp

発行日 2018年1月14日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: istock on Front page, Joe Maniscalco on pages 6, 46

Printed in Japan

誘惑に陥らない秘訣—「見えないかたを見ている」

「彼は、見えないかたを見ているようにして、忍びとおした」（ヘブル 11:27）。

「荘厳な威容を誇る山々にかこまれた人跡まれな場所にあつて、モーセはただひとり神と交わった。……ここでモーセが身につけたものは、彼のほねおりと苦勞に満ちた一生の年月を通じて変わらなかった。それは実に神のご臨在についての自覚であつた。彼は、将来、キリストが肉体をとって現われることを予見したばかりでなく、キリストがイスラエルの軍勢の旅に始めから終わりまで付き添っておられるのを見た。人々に誤解され、誤った評判をたてられたときにも、非難と悪口を忍び、危険と死に直面しなければならなかつたときにも、彼は、『見えないかたを見ているようにして』耐え忍ぶことができた」（教育 60, 61）。

「モーセは単に神について考えただけではなかつた。彼はこのお方を見た。神は彼の目の前に絶えず見えていた。彼は決してこのお方のみ顔を見失うことはなかつた。彼はイエスを自分の救い主としてみた。そして救い主の功績が自分に着せられることを信じた。この信仰はモーセにとって、当て推量ではなかつた。それは現実であつた。これこそ、わたしたちが必要としている種類の信仰であり、テストに耐える信仰である。ああ、わたしたちが目をイエスにため続けないために、なんとしばしば誘惑に陥ってしまうことであろう！」（教会への証 5 卷 652）。

「神のご臨在は、人が置かれ得る最も厳しい状況下を通じて、彼を支えるのに十分であつた」（争闘と勇氣 85）。

「エノクはどのように神と共に歩んだのであろうか。彼は自分の思いと心がいつも神のご臨在のうちにあることを感じるように教育した。……彼は絶えず自分の方法と道を神の戒めに従つて形成していた。そして彼は自分の天父が自分を助けて下さるという完全な確信と信頼を持っていた。彼には自分自身の思いや意志はなかつた。それはみな自分の御父の意志に飲み込まれていた」（説教と講和 1, 32(1886)）。

「このような交わりに、神はわたしたちを招いておられる」（福音宣伝者 53）。

第3課 創造 - わたしたちの嗣業 (I)

わたしたちの世界の始まり

もし一瞬でも考えてみるなら、化学、ビジネス、また産業は、疑いの余地なく、コンピュータの発達に立ち上がって拍手喝さいを送ることでしょう。その発明はわたしたちの社会に大変革をもたらしました。そしてわたしたちは一人ひとり直接的に、あるいは間接的にその恩恵を被っています。しかし、みなさんは立ち止まって、この素晴らしい一つの機械の中で何が起きているかを考えてみたことはありますか? 「ビット」や「バイト」、「チップ」や電気回路がほとんど超人的な妙技をなすためにみな組み合わせられた複雑な配列にあ然としても無理はありません。

では、著名なコンピュータ科学者であるこの分野での専門家が、年次のビジネス会議にゲスト・スピーカーとして出席し、コンピュータが何百年もの年月を越えて進化し、今日みなさんの地元のコンピュータショップで買える多用途な製品になったと思われる証拠があると言い出したら、どうでしょうか。偶然に、十分な年月をかけて、様々な金属が自然の厳しい力の下で、精錬され、精製され、分離され、結合され、必要なパーツのための合金を形成した。それから、これらの合金が、ある時間を経たらシリコン「チップ」へと進化し、さらにそれ自体がいくつかの無作為の工程を重ねて、様々な設計を持つ多数の「チップ」へと進化し、最終的に、何百万年の期間を経て、これらのすべての「チップ」が同時にプラスチックの進化に助けられて、偶然にもポンと最新のパソコンのかたちか、ちょうどそれに合ったプログラムパッケージと一緒にできあがった。しかし、レーザープリンターは、少しばかり進化するのに時間がかかったと言い出したら、どうでしょう。

もちろん、みなさんはおそらく、そのような考えを提案したその人を静かに会場から案内し、将来の講演依頼はキャンセルすることでしょう。それでいながら、わたしたちは宇宙と、存在し生きているすべてのものが、偶然に、あるいはある進化論者たちが言う「事故によって」存在するようになったと信じるように教えられているのです。

たしかに、事故は起きます。しかし、みなさんはそれらの結果がいつも混乱であることにお気づきでしょうか。事故が長く続くほど、混乱は大きくなります。例えば、一台の車の破損は一瞬で起こり得ます。複数の交通事故は数分続くかもしれませんが、結果として生じる大混乱は、事故の時間と規模に比例するのです。最終的な結果は、決して、元々の産物より良いものとも、秩序だったものともなりません。

粉々に砕け散ったガラスの破片は「事故」に結果を示すもう一つの実例です。事実、科学の世界でさえ、何らかの物理的な、あるいは科学的な反応の結果として生じる産物は、その前よりも体系的に劣ったものになる傾向にあるのが、不変にして普遍の法則です。反応が長いほど必然的に最終的な産物は、さらに破壊されたものになるのです。

そうであれば、当然、わたしたちは巨大な星の間の熱核反応による「何兆年にわたる事故」の産物は、甚大な大混乱であることを予測できます。しかし、わたしたちは何を見るのでしょうか？

計り知れない空間にある巨大な星座から、最も小さい原子に至るまで、わたしたちは完全と複雑な設計を見ます。人間の体には、化学がまだ説明のできない不思議が含まれています。命の建設ブロックである「単純な」細胞は、その設計の複雑さにおいても、作用の完全さも、有している情報の計り知れない宝庫も、それ自体を正確に複製する能力も、シリコン「チップ」を光年単位で先を行っています。なお一層、複雑なコンピュータの回路には設計者と製造者がいるように、知的に自然の不思議を観察する人はだれでも、人よりも無限に知的な設計者であり製造者であるお方がいるはずであるとの結論に至るのです。

では、どのようにして万物は始まったのでしょうか。わたしはどこから来たのでしょうか。わたしはなぜここにいるのでしょうか。わたしはどこへむかっているのでしょうか。聖書、すなわちわたしたちの教科書だけが、これらの問題に満足のゆく答えを与えています。

創造主はどなたか？

創造主の肩書にふさわしいお方は、創造された何ものよりも先に存在していなければなりません。最も早く、最も明確な記録が、わたしたちに啓示を与えます、「山がまだ生れず、あなたがまだ地と世界とを造られなかったとき、とこしえからとこしえまで、あなたは神でいらせられる」（詩篇 90:2）。

「世々の支配者、不朽にして見えざる唯一の神に、世々限りなく、ほまれと栄光とがあるように、アアメン」（テモテ第一 1:17）。

神は永遠であり、不死であり、知恵に満ちておられ、すなわち、永久であり、力に満ち、すべてをご存じです。このお方だけが創造主となることができます。聖書の一番最初の言葉は次のように記録しています、「はじめに神は天と地とを創造された」（創世記 1:1）。

さらに調べますと、創造における積極的な代理人は神格の第二のお方、すなわち言と呼ばれているお方であることを示しています「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」（詩篇 33:6）。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ 1:1-3）。

「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られ

たのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた」(ヘブル 1:1, 2)。

神、また神の御子が同様に、初世界を創造されたことが明らかです。御子は御父のご計画において協力する代理者であられました。神の御子、すなわち後に人のかたちをとり、天からこの世にイエス・キリストとして来られたお方こそ、言、すなわち、創造主であられたのです。

地の創造

わたしたちが何かを作ろうとするとき、構築し始めるために、まず原材料(例:木材や金属)が必要です。創造主は地を、そして諸世界を造られるときに、どの材料をお用いになったのでしょうか。

「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである」(ヘブル 11:3)。

この世のすべての物質が造り出された、すなわち存在するようになったのは、神のみ言葉によってでした、「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」。「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」(詩篇 33:6, 9)。

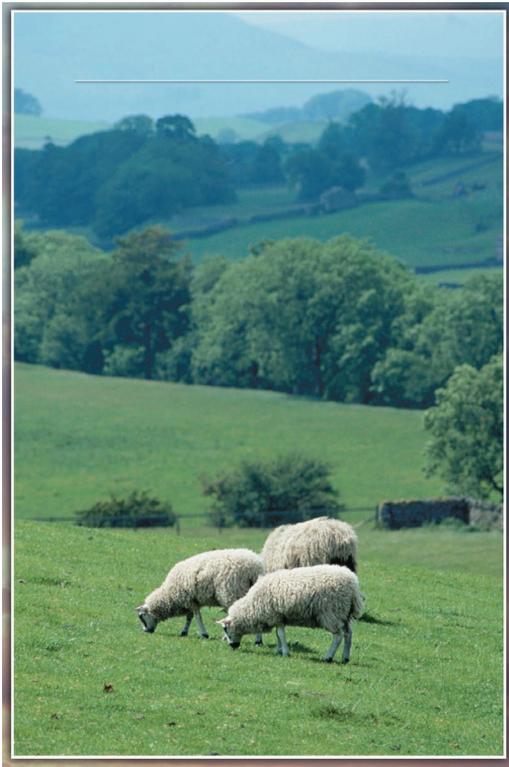
地が形造られたとき、それはまだ暗い惑星で、水と濃く重い雲に覆われていました。そのとき、創造主はこの世界を美しい場所、すなわち王にふさわしい家とすることを始められました。聖書の最初の章にある記録をお読みください。

創造の週のすべての日は、暗い部分と明るい部分、すなわち夕(つまり、夜)と朝(つまり、昼)、24時間の期間からなっていることに注目してください。多くの人々は、これほど多くのものが、文字通りの一週間というごく短い時間に形成されるのは不可能だと言います。しかし、彼らは、「神にはなんでもできない事はない」を忘れているのです(マタイ 19:26)。これに加えて、わたしたちが知っているように、命が、非常に長い期間を越えて存在するようになるのは、まったく不可能です。なぜなら、すべての命は他のかたちの命に依存しており、それがなければ存在しえないからです。これは神によって定められた自然の法則です。例えば、果樹や花は実や種を産出するために自分たちの花に受粉させるハチを必要としています。そしてハチは花蜜を食べるために花を必要としています。地上にあるすべての命は、ほとんど同時に創造されなければなりません。そして、聖書の記録によれば、その通り創造されたのです。地は、文字通り六日間のうちに創造され、第七日目と共に初めの週を形成しています。今日なお、初めに定められたという以外に、一週間の周期が存在する他の証拠はありません。

「こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである」(創世記 2:1-3)。

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの間となつて下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

02 月

2月1日

命を与える提示

「イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。」(マタイ 5:1, 2)

山上の垂訓はすばらしい創作であるが、子供でも誤った方向へ導かれることなく研究できるほど単純である。山上の祝福はキリストが立たれた高みの象徴である。このお方は他にないまったくこのお方だけの権威をもって語られた。このお方が口にされた一つ一つの文章は神からのものであった。このお方は神の言葉であり、知恵であられた。そしてこのお方はいつも真理を神の権威をもって提示されたのである。このお方は「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」と言われた(ヨハネ 6:63)。(クリスチャン教育の基礎 407, 408)

山上のこの垂訓はすべてを通じて、クリスチャン経験の一連の進歩である。闇の使たちは、キリストが無限の犠牲によって買われた魂が品性の完全へと到達できるように引き下がっていなければならなかった。次のみ言葉が語られる、「引き下がっていなさい。この魂はあなたのものではない。これはキリストの尊い血によって買われたものである。引き下がっていなさい。わたしとわたしの父とは一つである。そしてわたしたちはこの魂を義へと引き寄せるのである」。もし魂がキリストへ引きつけられないなら、それは意志が神のご意志の側になく、敵の側にあるからである。もし人が神と協力しさえするなら神は彼のうちにその願いを起こさせ、み旨のよしとされることをなしてくださる。そして人は恐れおののいて自分の救いの達成に努めるのである。あなたがはるかに大きな度合いで主の助けを実感しない理由は、あなたが自己中心で、あなたの意志が神のご意志の側がないからである。主はあなたの様式に、あなたの衣服に、あなたの精神に、あなたが祝福されていることを表すよう望んでおられる。このお方はあなたが世とキリストに従う者との境界線がはっきりしていることを示し、それによって神に仕える者と神に仕えない者との間の相違がいつもはっきりと識別できることを望んでおられる。もし世の人々があなたが自分の周りの人々と違うことを認めないならば、あなたの宗教の告白によって感化されることはない。なぜなら、あなたはキリストの香りとならず、一人の魂も神への奉仕へ勝ち取らないからである。しかし、天には星のない冠をかぶっている者は一人もないであろう。もしあなたが救われるとしたら、栄光の宮廷にはあなたという器を通してそこに入った魂がいるのである。そうであれば、主の御霊を着せて下さり、それによってあなたの周囲の人々の思いのうちに、真理への関心を呼び覚ますことができるように、主に嘆願しないであろうか。(バイブル・エコー 1892年6月15日)

わたしたちの貧しさを感じられる

「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」(マタイ 5:3)

わたしたちにもっと御霊と神の力がない理由は、あまりにも自己満足を感じているからである。真理に改心した人々の間で、ある程度は前進するが、そのあとそれ以上進歩しない無反応状態に落ちてしまうという著しい傾向がある。彼らは自分たちのいるところで立ち止まり、主なる救い主イエス・キリストの恵みと知識において成長するのをやめてしまう。しかし、キリストの宗教は、継続的な進歩を要求する性質のものである。主はわたしたちがキリストの満ち満ちた徳の高さにまで到達したと感ずるようには計画しておられない。永遠を通じて、わたしたちはこのお方の知識において成長するのである。……もしわたしたちがこのお方の恵みから引き出したいなら、自分たちの貧しさを感じなければならない。わたしたちの魂はキリストがわたしたちのために働いて下さらなければ、滅びてしまうことを自覚するようになるまで、神への激しい切望に満たされなければならない。

わたしたちが救いのために全くキリストに依存していることを感ずるようになる時、わたしたちは腕組みをして「わたしには何もすることは無い。わたしは救われている。イエスがすべてをなしてくださった」と言うのであろうか。否、わたしたちは神性にあずかる者となることができるように、全精力を傾けなければならない。わたしたちは絶えず、見張り、待ち、祈り、働いているべきである。しかし、わたしたちができるすべてのことをしても、自分の魂のための贖い代を支払うことはできない。わたしたちは信仰を創出することができない。なぜなら、信仰は神の賜物だからである。またそれを完全にすることもできない。なぜなら、キリストがわたしたちの信仰の完成者であられるからである。すべてはキリストからである。より良い人生を切望する思いはキリストからであり、このお方があなたをご自分の許へ引き寄せておられる証拠であり、あなたがこのお方の引き寄せる力に感ずている証拠である。あなたは陶器師の手のうちの粘土とならなければならない。そしてもしあなたがキリストに自ら服するならば、このお方はあなたを尊い器に形作り、主人のご用にふさわしいものとしてくださる。神聖な型に従って形成されない魂の道に立ちほだかっている唯一のものは、その人が心の貧しい人にならないことである。なぜなら、心の貧しい人は、自分を神に対して富んだものとする恵みを得るために、自分自身よりも高い源なるお方を眺めるからである。彼は自分自身では何も創出できないと感ずる一方で、次のように言うのである、「主はわたしの助け主である」(ヘブル 13:6)。(パウル・エー 1892年 6月 15日)

わたしたちは幼子として神のみ許へ行かなければならない。そしてわたしたちが自分の貧しさと弱さを自覚するとき、それを何の力を与えることもできない人に告げるのではなく、神に告げるのである。なぜなら、神はわたしたちのためにまさに何をなすべきかをご存じだからである。(同上 1892年 6月 1日)

2月3日

悲しんでいる人々への慰め

「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。」(マタイ 5:4)

快活でいること、さらに喜ばしくいることは正しいことである。真理の聖化を通して快活な精神を培うことは正しいことである。しかし、愚かにふざけたり、冗談を言ったり、あるいは軽率や軽薄になったり、他の人の批判や非難の言葉にふけったりすることは正しくない。宗教を告白するこのような人々を見る人々には、彼らが欺かれていることがわかる。彼らはそのような公言者の手が清められなければならない、彼らの心が精錬されなければならないことがわかる。彼らは罪に対する本物の悔い改めの経験を必要としている。彼らは何を嘆き悲しまなければならないのであろうか。彼らは自分たちの罪に対する傾向と、内にある墮落及び外の誘惑からくる自分たちの危険性を嘆き悲しむべきである。彼らは自分たちに、あまりにも罪の罪深さの自覚が弱く、何が罪を構成しているかについてあまりにも観念がないために恐れるべきである。

あなたが真に罪を悔い改めるとき、あなたは単に自分が罪深いことを認めるだけで、事態をそのままにして満足することはない。あなたは残りの人生を罪深いままでいるつもりなのであろうか。あなたは自分の良心を犯すつもりなのだろうか。あなたはいつも悪を行うつもりなのだろうか。主は光を持っていながら、その光に従って生きることをしない人々について、何とされているであろうか。「人が、なすべき善を知りながら行わなければ、それは彼にとって罪である」。「主のみまえにへりくだれ。そうすれば、主は、あなたがたを高くして下さるであろう」(ヤコブ 4:17, 10)。……「彼についてこの望みをいいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」(ヨハネ第一 3:3)。……彼は魂に永続的な原則を持っており、その原則は彼が誘惑に勝利できるようにする。「すべて彼における者は、罪を犯さない」(6節)。神にはキリストのうちにいる魂を、誘惑の下にあるときに守る力がある。(ユース・インストラクター 1894年2月15日)

自分たちの貧しさ、自分たちの失われた準備のできていない状態を自覚し、自分たちの罪と過ちを嘆き悲しんでいる人々は幸いである。主は悲しんでいる人々は慰められるであろうと言われるが、それはパリサイ人のように自らを高めることではない。自分の罪を嘆き悲しんできた人は、自分自身のうちに何の功績もないことを知っている。彼はイエスのうちに「万人にぬきんで」「ことごとく麗しい」ことを見て(雅歌 5:10, 16)、そして自分の愛情をキリストに集中させる。もしイエスがあなたにとって、愛情の中心であったならば、すなわちあなたの愛情がおかれているお方ならば、その愛を自分の心の中に隠し、決して表れないようにするのであろうか。否、あなたはこのお方の愛について語り、このお方の精神をとらえ、このお方の模範にならうのである。(パイブル・エコー 1892年6月1日)

2月4日

唯一の相続者たち

「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。」(マタイ 5:5)

心の貧しい人は自分の貧しさを並べ立てたりはしない。彼はへりくだりと柔和を表すことによって、また自分を高めるために人を軽視しないことによって、自分がこの種類の人であることを示す。彼にはこうする時間がない。彼は自分自身の品性のうちに自分が注意しなければならないあまりにも多くの欠点を認める。罪人に対する神の無限の愛と憐れみを眺めるとき、彼の心は溶かされる。彼は自分の貧しさを感じる。しかし、自分の弱さに注意を引く代わりに、彼は絶えずキリストの恵みの富、またこのお方の義の衣を求める。彼の心の言葉は、「自己をより少なく、あなたをもっと多く」である。彼はイエスを願ひ求める。彼は自分自身のうちに、キリストがご自分の尊い血という無限の代価をもって自分のために買ってください自由を得させることのできるものは何もないことを知っている。彼は自分のなしてきた良い行いにはみな自己が混ざっていることを認める。であるから、彼はクリスチャン人生において自分の成し遂げたことのために自分に栄光を帰すことができないのである。彼はキリストの血のほかには功績のあるものがないことを悟る。しかし、まさにこの自覚のゆえに彼は祝福されるのである。なぜなら、もし彼が自分の必要を感じなかったならば、天の宝を得ることはないからである。(パイブル・エコ- 1892年5月15日)

聖化の最も尊い実は、柔和という恵みである。この恵みが魂の中で支配すると、気質はその感化力によって形づくられる。絶えず神を待ち望み、神のみ旨に意志を従わせる。理解力はすべての聖なる真理をつかみ、意志はすべての規則に疑うことなく、つぶやくことなく頭を垂れる。真の柔和は、心をやわらげ従わせて、思いに刻まれたみ言葉に対するふさわしさを与える。それは思想をイエス・キリストに対する従順に至らせる。それは神のみ言葉に対して心を開かせる。……

キリストの学校における柔和は、聖霊の顕著な実の一つである。それは聖化させる聖霊によって働く恵みであり、それを持つ人はいつも自分の性急で激しい気質を支配できるようになる。柔和という恵みを、生まれつき不機嫌で短気な気質の人々がいだくとき、彼らは自分たちのみじめな気質を征服するために最も熱心な努力を払う。毎日、彼らは自制力を得て、ついには麗しくないもの、イエスに似ていないところが征服される。彼らは神聖な型なるお方に同化し始め、ついには靈感を受けた次の指示に従うことができるようになる。「人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである」(ヤコブ 1:19)。(レビュー・アソシエーション・パブリッシャー 1881年1月18日)

2月5日

わたしたちの飢えと渇きを引き起こすのは何か

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りようになるであろう。」(マタイ 5:6)

わたしたちの義への飢え渇きは、わたしたちが魂に与えている食物に比例する。わたしたちは世から、すなわちその習慣やならわしから分離し、自分たちの生活を義の標準に一致させるにつれて、ますます義に飢え渇くようになる。イエスはご自分の神性に人性を覆われた。それは信仰を通して人類が神性をつかむことができ、義への飢え渇きを通して、神性と緊密な結合に入るためである。人間代理人の特権は非常に大きい。わたしたちは神なしには満足できないし、主もまたご自分が無限の代価をもって買われた愛なしには満足なさらないのである。神はわたしたちにキリストを、そしてこのお方と共に全天を与えて下さった。それはこのお方が失われたわたしたち人類を取り戻して、ご自身に密着させ、わたしたちもまた神の満ちみちた徳で満たされることのできるためである。……

あなたは神聖なみすがたに同化したいであろうか。あなたが義に飢え渇くものになりたいであろうか。あなたはキリストが自分に与えて下さる水、すなわちあなたのうちで永遠の命へとわきあがる泉となる水を飲みたいであろうか。あなたは神の栄光のために実を結びたいであろうか。あなたは他の人々を清新にしたいであろうか。そうであれば、心から命のパン、すなわち神のみ言葉への渴望をもって、聖書を調べ、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きなさい。あなたの魂の聖化と義は、神のみ言葉を信じる信仰、すなわち、神のみ言葉の命令への従順へ導く信仰の結果として生じるのである。(サイン・オブ・タイムズ 1895年9月5日)

神は満ちみちた救いを約束された。それでいながら、世は娯楽、流行、世の賞賛、あるいは自分自身のやり方を通すことに飢え渇いている人々が満ちている一方、義に飢え渇き、天の満ちみちた徳が与えられる水路に沿って自分たちの願望を向ける人がなんと少ないことであろう。あなたは神と共に働く共労者となれるように、自分の意志を神のみ旨の側に置こうと決心しないであろうか。イエスは「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、……わたしの証人となるであろう」と言われる(使徒行伝 1:8)。そうであれば、わたしたちの弱さ、冷たさ、また怠惰に言い訳があるであろうか。自分が弱さに満ちていることを認めたら、自分たちの罪に石膏を塗ったものと考えている人が多くいるようである。しかし、わたしたちは自分たちの弱さを語るのではなく、キリストのうちに満ちみちた救いを見出さなければならない。(バプトル・エー 1892年6月15日)

2月6日

天で音楽を奏でる行為

「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。」(マタイ 5:7)

キリストはご自分の贖われた人々に次のように言われる、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。(マタイ 25:34-40)。

自己否定的な労働が要求されるところで忍耐強く労することは、天がほほ笑む栄光に満ちた働きである。忠実な働きは、最も熱心で、最も聖なるものと考えられている礼拝よりも神に受け入れられる。真の礼拝はキリストと共に働くことにある。祈り、忠告、そして言葉は安っぽい実であり、これらに従事することが多いが、よい行い、すなわち困窮している者、みなしご、やもめの世話をすることにあらわされる実は、本物の実であり、良い木に自然に実るのである。

御父の前に清く汚れのない宗教とは、これである。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まらずに、身を清く保つことにほかならない。」(ヤコブ 1:27)。行う原則は、キリストがわたしたちに実らせることを要求しておられる実である。すなわち、慈善行為を行うこと、親切な言葉を語ること、貧しい人や困窮している人や苦しんでいる人に優しい心遣いをあらわすことである。だれかの心が失望と悲しみの重荷を負っている他の人々に同情するとき、彼の手が裸な者に着せ、旅人が彼の居間と彼の心にある座に歓迎されるとき、そのとき天使たちは非常に近くに来て、応答の旋律が天でこたえるのである。一つ一つの行為、義と憐れみと慈善の行いは、天で音楽を奏でる。……困窮している人あるいは苦しんでいる人への憐れみ深い一つ一つの行為は、あたかもイエスになされたかのようなものである。貧しい人を助け、苦しんでいる人や虐げられている人に同情し、みなしごの友となる人はみな、自らますますイエスと近い関係に入るのである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1881年8月16日)

2月7日

純潔は靈的な視力を鋭くする

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。」(マタイ 5:8)

わたしたちは、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させることによって、自分の生活と品性が純潔によって特徴づけられない限り、神のご品性を靈的に識別したり、イエス・キリストを受け入れたりすることができない。魂の諸機能を引き下ろし、墮落させたのは罪である。しかし、わたしたちの贖い主としてのイエス・キリストを信じる信仰を通して、わたしたちは清潔と真理へ回復されることができる。キリストから学びたい者は、人間の知恵を空にされなければならない。魂はあらゆる虚無や誇りから清められ、魂を先入観のうちにとらえているすべてのものを立ち退かせ、キリストが心のうちで奉じられなければならない。(説教と講和 1 巻 271)

思想と習慣における不純は、靈的な視力を曇らせるため、魂が神のご品性を熟考したり、魅了されたりできなくする。世は不従順で満ちている。そして人の理解力は、一連の罪深い行動によって暗くなっているため、義がはっきり識別されず、それゆえに義が不義にまさるものとして正しく評価されていない。心の清い人たちは、律法の中にご品性あらわされている神を見るであろう。(サインズ・オブ・タイムズ 1895 年 10 月 3 日)

もしわたしたちの心がきよければ、わたしたちの言葉も清くなり、行動も聖なるものとなる。わたしたちの心が純潔で、わたしたちの手が清くない限り、わたしたちは神のご品性の麗しさを識別することも、聖なるお方と交わりを持つこともできない。わたしたちの心が純潔で聖なるものとなるべき時は今である。わたしたちにはキリストが現れるときに品性に変化が起こるという約束はない。もしわたしたちが主に義のうちに捧げ物をささげたければ、思想、言葉、行為において罪深いものを一切捨て去るべきである。もしわたしたちが悪を抱いているなら、受け入れられる嘆願を捧げることはできない。わたしたちの賛美は神へ芳しい香として上ることができないのである! ああ、わたしたちはどれほど心の純潔さを必要としていることであろう! キリストの名を名乗るすべての人は、あらゆる不義から離れよう。だれ一人として、心の中でサタンに彼の王座を建てることを許し、汚れをもって道徳的な雰囲気を満たしながら、キリストはわたしたちの心の小さな一面で満足なさると考えることがないようにしよう。キリストは心がすっかりご自分に明け渡されるときに初めて魂のうちに宿られ、そのとき品性は神聖な姿に似て発達するのである。わたしたちは心のうちにあるものを隠すことはできない。魂を占めているものは、現れるのである。もしわたしたちが心が清いならば、神を見るであろう。わたしたちは光と力を集め、ますますイエスに似た者となるのである。(ユース・インストラクター 1896 年 1 月 9 日)

2月8日

わたしは本当に平和を作り出す人であろうか

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。」(マタイ 5:9)

もしキリスト・イエスのうちにあるのと同じ思いがあなたのうちにあるなら、あなたはキリストの教訓を実践するようになり、このお方の大いなる憐れみを感謝するがゆえに、平和を作り出す人となる。あなたはイエスを眺めて、このお方、すなわち生きたぶどうの木から栄養を受け、あなたは枝として親木と同じ種類の実を結ぶようになる。あらゆる義の敵は、あなたを平和を作り出す人がたどる道とは正反対の道へ導こうと待ち構えている。不和と争いが好きな人が、あなたを誘惑して紛争をかき立てる自分との関わりにおいて役割を果たさせようとするであろう。彼はあなたがある兄弟や姉妹のうちに悪いところがあるのを見ていると思うように導くであろう。そしてサタンはあなたが行ってそれを他の人々に告げるようにせきたてるのである。しかし、キリストはあなたの兄弟のところへ行き、そして「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい」とお命じになった(マタイ 18:15)。あなたはどちらの指導者に従うつもりであろうか。率直に忠実に互いに扱うことは、生来の心に一致するものではない。自分の兄弟の過ちをその人だけに告げるよりは、他のだれかに告げる方がたやすく見える。しかし、あなたの告発を聞くべきなのは、その人の耳だけである。キリストが自分の道に輝くようにして下さった明白な光から離れる人は、キリストの伝道者となる特権を失い、邪悪な者の代理人になるのである。もしキリストに従うと公言する人々がこのお方のみ言葉に従いさえすれば、どれほど多くの教会の試練が避けられたことであろう! [マタイ 5:9 引用]。神と調和して働く人、キリストと共に働く共労者は幸いである。神の御霊が与える恵みは魂にとって命の泉であり、平和を作り出す人と接触するようになるすべての人を清新にするのである。

キリストに従うと公言する人々が、親切や慰めの言葉で魂を助けることができず、時に、サタンの計画を実行するのに忙しく、それによって紛争をかき立て、魂を失望させ、彼らをサタンの戦場へ追いやったがために、どれほど多くの魂が失われてきたことであろう。サタンは紛争をかき立てる者である。彼は妬み、嫉妬、邪推に満たされていたために、神と等しくあろうとしたために、天を失った。わたしたちが今抱いている精神、今している行いが、将来の生涯のためにわたしたちがふさわしいことを証しているか、ふさわしくないことを証しているかを考えることは重要である。(サイン・オブ・タイムズ 1895年10月10日)

2月9日

迫害のただ中における神のご臨在

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをのしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」(マタイ 5:10-12)

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである」(彼らを紛争や不和へ導く彼らの粗雑で辛辣な精神のためではなく、「義のために」である)。義人とは平和を願い、原則を犠牲にしない限り、平和を得るためにはすべてを犠牲にする人々である。彼らは真理は犠牲にすることができない。たとえ真理の遵守が彼らに苦悩、非難、苦難、あるいは死でさえ要求したとしても、彼らは真理を犠牲にすることはできない。なぜなら「天国は彼らのものである」だからである。義のために迫害される人々は自分の生活において神の戒めを第一に置く。そして彼らは人間の政策を容認せず、報酬の約束も、栄誉の申し出も自分と自分の神の間に入り込むことを許さない。キリストを拒んだり、このお方のみ事業を裏切るよう彼らを誘導することはできない。神の豊かな約束は彼らの記憶の中におかれ、敵が洪水のように押し寄せてくるとき、主の御霊が彼に対して旗を掲げて下さる。聖霊は聖書の尊さを理解力に開いてくださる。

[マタイ 5:11, 12 引用]。これらの言葉は満ちみちて、広く、深い。そしてあなたは意気消沈したり、信仰において揺らいだり、つぶやきや文句に満たされてはならない。時間も勇気も信仰もみな尊いものであり、意気消沈やつぶやきのために犠牲にするにはあまりにも尊い。キリストはあなたに喜ぶように、はなはだしく喜んでいようと命じておられる。全天は見守っており、あなたを助ける準備ができている。……

神の憐れみに漠然と頼ることは、わたしたちを恵みのみ座に近づかせることがなく、父なる神がご自分のみ旨を行う人々に提供してこられた祝福をもたらすこともない。信仰は神のみ言葉に集中しなければならない。神のみ言葉は霊であり、命である。聖なるみ言葉の一頁一頁は義の太陽からの光線で照らされている。神のみ言葉は苦しんでいる人の支えとなり、迫害されている人の慰めとなるのである。神ご自身が、信じ信頼する魂に語りかけられる。なぜなら、神の御霊はこのお方のみ言葉のうちにあり、神のみ言葉を受け入れる人々は心が聖霊によって照らされるときに特別な祝福を受けるからである。このようにして、信徒はキリスト、すなわち命のパンを食べるのである。真理が新しい光のうちに見えるようになり、魂はキリストの目に見えるご臨在にあるかのように喜ぶのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1895年10月10日)

塩と光

「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。」(マタイ 5:13, 14)

救う塩とは純潔な最初の愛、イエスの愛、火で精錬された金である。これが宗教経験からなくなると、イエスはそこにおられない。光、このお方のご臨在の日光はそこにはない。であれば、宗教の価値は何であろうか。ちょうど味のなくなった塩とまったく同じである。それは愛のない宗教である。そのとき、忙しい活動、すなわちキリストのない熱心さによって欠如を埋めようとする努力が生じる。驚くばかりの知覚力の鋭さで兄弟や姉妹のうちに欠点を発見し、これらを目立たせるのである。わたしたちは律法を守ると公言する者である。そうであれば、神の戒め、愛である律法に従おう。そのとき、ダビデのようにわたしたちは「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と言うことができる(詩篇 40:8)。(バィグル・エー 1892年3月1日)

神の民の良い行いには言葉よりも力強い感化力がある。彼らの徳のある生活と無私の行為によって、それを見る者はそのような良い実を産出する同じ義を願うように導かれる。彼は利己的な人という存在を神聖なみすがたに変える神からの力に魅了され、神は尊ばれ、その御名は栄光を受ける。しかし、神の民が世の奴隷のくびきにつながれるようになると、主は辱めを受け、このお方のみ事業は非難を受ける。彼らの救いの唯一の希望は、世から分離し、熱心に彼らの分離した聖なる特別な品性を維持することである。ああ!なぜ神の民はこのお方のみ言葉の中にある条件に応じようとしないのであろうか。もし彼らがそうするならば、神からへりくだる従順な者におしみなく与えられているすばらしい祝福を自覚しないようなことはないはずである。

完全、聖潔、これに足りないものは何も、神が彼らに与えてくださった諸原則を実行することにおいて成功を与えることはない。この聖潔がなければ、人間の心は利己的で罪深く、不道徳である。聖潔は、それを持つ者を実り豊かであらゆるよいわざに富む者とさせる。彼は善事を行うのにうみ疲れたり、この世において昇進を待ち望んだりすることは決してない。彼は天の大君が聖化された者たちをご自分の御座へと高めて下さるときに、昇進することを待ち望むのである。(レビュー・アンド・ハラルド 1885年5月5日)

2月11日

キリストの働き

「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思っはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言うておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。」(マタイ 5:17, 18)

人に罪を、すなわち律法の不法を自覚させ、ご自分の仲保を通して彼らを従順の道へ戻すことは、キリストの働きである。(バイブル・エコー 1887年1月1日)

墮落の物語が、今日幾千もの唇によって繰り返されてはいないだろうか。講壇からでさえ、わたしたちは、あなたがたは決して死ぬことはないでしょう、との誘惑者の言葉を聞かないであろうか。神の律法は、好きなように犯す自由がある奴隷のくびきとして表されていないであろうか。サタンはアダムとエバに、神聖な命令を犯すことによって、より高く、より幸福な状態に達することができるほどのめかした。そして今日同じ偽りが聖化されていると主張する人々によってさえ、世界中に広められていないであろうか。これらの神のご命令を犯しながら、聖化を主張する人々が、世にとって偽りの致命的なしるしとなっていないであろうか。彼らは罪人に「あなたは……安らかであろう」と言わないであろうか(詩篇 128:2)。主は罪をご自分の律法の違反と定義づけられたが、彼らは自分たちは罪の中で救われていると言い、こうしてキリストを罪に仕える者としている。これらの自称クリスチャンたちはサタンがパラダイスでした働きそのものをしているのであり、教えと模範によって魂を道から迷いさせている。彼らは罪人に向かって、すなわち違反者に向かって、あなたは大丈夫だと言う。あなたは神の律法を犯すことによってより高く、より聖なる状態にのぼるであろうと。全地をめぐって聞かれる教訓は、「従わずに生きよ」である。しかし、この教えはキリストの教訓となんと異なることであろう。(サインズ・オブ・タイムズ 1890年4月28日)

大敵、最初の反逆者であり背信者である者が、神の戒めに対して戦いを挑んでいる。なぜなら「律法によっては、罪の自覚が生じる」からである(ローマ 3:20)。これこそ、彼が世を神の律法には拘束力がないと信じさせたい理由である。なぜなら、そのとき彼は人々を、自分たちが罪人であり、救い主を必要としているという事実について無知のままにしておくことができるからである。(同上 1894年10月15日)

神はすべての人を聖所の秤で測っておられる。一方には完全で不変な律法があり、継続的で揺るぎのない従順を要求している。もしもう一方に幾年もの忘却、利己心、あるいは反逆と自己満足があるなら、神は「あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれた」と言われる(ダニエル 5:27)。しかし、キリストはわたしたちが律法を守るようにしてくださった。このお方は地上で完全な従順の生涯を送られた。これはこのお方の義がわたしたちに着せられることができるためである。(レビュー・アット・ヘラルド 1901年6月4日)

律法を大いなるものとされるキリスト

『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」(マタイ 5:27, 28)

律法によっては、罪の自覚が生じるのみである。そしてその光のうちに〔罪人は〕秘かな思想や闇の行いの邪悪さを悟る。神の律法は、彼がかつては決して自分の生涯を見たことのない光のうちに物事を提示する。彼はわたしたちが自分の舌で語ること、自分の手でなすこと、自分の外側の生活にあらわすことは、自分の品性を作り上げるほんの小さな部分にすぎないことを知る。律法は心の思想や意図を貫く。それは秘かに抱いた暗い情欲や、嫉妬、妬み、盗み、殺人、悪意、野心、そして人の目からは隠され気づかれずにいる悪を探り出す。人はなんとしばしば、現れる機会がなかったために人目につかなかった暗いものを心の中に持つ人々を高めることであろう。しかし、神の律法は隠れた悪を登録する。賢者は次のように宣言している。「神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」(伝道の書 12:14)。

律法には人間という知的存在者に対して拘束力があることを信じてと主張する多くの人々が隠れた罪を軽く考え、大胆にそれらをたずさえ、自己義のうちにあたかも本当に神のみ言葉を行う者であるかのように満足している。彼らの働きはその欠陥のある品性の印を帯びており、神は彼らの助け手となることがおできにならない。神は彼らと協力することがおできにならない。

品性は天によって、人の目にあらわされたものによるよりも、内なる精神、隠された動機によって、天に試され、登録される。人々は墮落と不潔に満ちた白い墓にすぎない者でありながら、好ましい外面を持ち、外側は素晴らしいかもしれない。彼らの行いは聖化されていない、きよくないものとして登録される。彼らの祈りと行いにはキリストの義がなく、神のみ前に芳しい香として昇って行かず、かえってそれらは主の御目に忌むべきものである。自分の目を開く人々にとって律法は魂の完全な姿、内なる人の完璧な写真を提示する。そして、罪人の前にこの写真の覆いが取れるとき、彼らは自分が罪の下に売られていること、律法は聖であり、義であり、善であることを認めざるを得ないのである。(サイン・オブ・タイムズ 1890年11月3日)

かつてしたことがないほど、自分の聖書を調べなさい。あなたが自分の宗教生活において、より高く、より聖なる態度へと上らない限り、わたしたちの主の来臨の準備はできていないのである。(ビュー・アンド・ハラド 1888年12月11日)

2月13日

わたしたちの偶像を放棄する

「もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。もしあなたの右の手が罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に落ち込まない方が、あなたにとって益である」(マタイ 5:29, 30)

主はご自分の民のために大いなる事をなそうと待っておられる。しかし、彼らは心において純潔でなければならない。……神のみ前にわたしたちの心をへりくだらせ、このお方がわたしたちのすべての不義を赦し、わたしたちのすべての罪を許して下さったことを信じようではないか。わたしたちはこれ信じない限り、神を尊び、イエスをわたしたちの個人的な救い主とすることはできない。わたしたちは民として自分たちの形式主義から立ち上がらなければならない。わたしたちは狭い門から入らなければならない。サタンはすべての魂の道を阻止するために自分の活動的な代理人を道すがらおいてきた。キリストはご自分に従う人々に恐れてはならないと励ましてこられた。前進せよ、あなたの道を推し進め。「また、ほかの譬を彼らに示して言われた、「天国は、良い種を自分の畑にまいておいた人のようなものである。

「狭い戸口からはいるように努めなさい。事実、はいろうとしても、はいれない人が多いのだから」(ルカ 13:24)。愛しいものよ、例えそれが右の目をえぐり出し、右の腕を切り落とすようなものであっても、心に抱いている偶像を放棄し、ふけてきた罪を捨てなければならない。苦しめ!あなたの道に反対する黄泉の軍勢そのものを突きぬけてあなたの道を推し進め。

ああ、わたしたちは、勝ち取るべき天があり、避けるべき地獄があることを、すべての魂におそるべきほど熱心に印象づけなければならない。魂のすべての精力が自分の道をおし進むために目覚めさせられ、力によって御国を奪いとらなければならない。サタンは活動しているのであるから、わたしたちも活動しなければならない。サタンは倦むことなく辛抱強いのであるから、わたしたちも同じでなければならない。自分たちの背教の言い訳をしたり、他の人のせいにしていたりする時間はない。状況さえもつとよければ、わたしたちはどれほどよりよく、どれほどもつとやすく、神のみわざをなすことであろうと、魂にむなしい希望をいだかせる時間はない。わたしたちはキリストを信じると公言する人々にさえ、その罪深い言い訳によって神に対して罪を犯すことをやめなければならないと告げねばならない。イエスはすべての緊急事態のために備えをしてこられた。もし彼らがこのお方の導いて下さる道を歩むなら、このお方は起伏の多い場所を平らにしてください。このお方はご自分の経験をもって、魂のために大気を創造してください。このお方は戸を閉じて、魂を神とだけ遮断された場所へ導き入れて下さる。そして困窮している魂は、神以外はすべての人とすべての者を忘れるべきである。サタンは彼と語るであろうが、神に向かって大声で語りなさい。そうすればこのお方はサタンの黄泉の影を押し返してください。へりくだりや和らげられた感謝に満ちた心をもって、彼らは現れて次のように言うのである、「あなたの助け(優しさ)はわたしを大いなる者とされました」(詩篇 18:35)。(原稿リ-ス 12 巻 335, 336)

2月14日

どのような経済においても最も安全な銀行

「むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。」(マタイ 6:20, 21)

天に宝を蓄えることは、わたしたちの資金を無私の用途に使用する義務を指し示している。わたしたちは神の所有物の管理者である。それらは墮落した願望の満足や利己的な放縦に用いるためのわたしたちの所有ではない。全天はわたしたちが神から委託されたタラントをどのように用いるか関心を持って見守っている。もしわたしたちが天に宝を蓄えるならば、主のみ事業を前進させるために、魂を救うために、そして人類を祝福するためにこのお方の財産を用い、そのように用いられたすべてのものを主は決して損失をもたらすことのない銀行にあるわたしたちの口座に入れてくださるのである。心が神を最高に愛するとき、財産はクリスチャンの安寧を促進する妨げとはならない。なぜなら、献身した人はなすべき最高の投資を見極め、自分の富を神の子らを祝福するために用いるからである。

地上の富を獲得するために能力を継続的に用いていると、その人は、地上に縛られる。彼は、富の奴隷になる。富が増えると、偶像礼拝の心は、神を忘れがちになり、自ら安んじ、また自己満足に陥りがちである。宗教的な責務はおろそかにされる。制約されるといざだちを表し、その人は自己満足に陥るようになる。心の眼が地上の事柄に向けられるため、あらゆる霊的な事柄が曇る。生来の性質と経験から生じる世的な傾向が、ますます完全に発達し、霊的な機能は麻痺するのである……

わたしたちのためになされた驚くべき犠牲についてよく考えようではないか!失われた者を更生させ、父なる神の家へ連れ戻すために天が費やしている労働と精力をもっと正しく評価するよう努めよう。これ以上強い動機、これ以上強力な働きを動員することは決してできない。すなわち、天の楽しみ、正しい行いをすることによる多大な報酬、天使の交わり、神と御子の交わりと愛、永遠にわたるわたしたちのあらゆる力の上昇と拡張である。そしてそれは、「人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(コリント第一 2:9)。以上の様々な事柄は、わたしたちが創造主であり救い主であられるお方に、心からの愛の奉仕を捧げずにはおれない力強い動機と励ましではないだろうか。(パイブル・エコ-1889年2月15日)

2月15日

あなたはどの主人を選んでいるであろうか

「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」(マタイ 6:24)。

世が考え、原則、行動の主人となっている間は、主が栄光をお受けになることはできない。世の潮流が、世の関心やのぼせ上りの潮に乗せて魂を連れ去るような力をもって押し寄せる。悪天使であり、真理の大敵であり、偽りの父であるサタンは、聖なる人類を破滅させる自分の計画を上手く実行してきたが、自分の優位性を保ち、人の救いと神の恩寵への回復を妨げるために手段を尽くして奮闘する。彼は人の思いを世の計画や野心で夢中にさせる。そして天とキリストは、思いと愛情から締め出されるのである。……

今日、どれほど多くの人々が、真理の力と美しさを目にするのであろう。しかし、彼らは、神と富に仕えることはできず、彼らは世をつかむのである。真理は、この世における名誉、仕事における地位、日々の食物を犠牲にすることを求める。そのため、彼らはつまずき、失敗する。彼らは、まず天の王国を求める者への神の約束について考えることをしない。彼らは、次のような言い訳をする。「わたしは、周りの人々と違うものになることはできない。彼らが何というだろうか。」「あなたがたは知らないのか。あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であ……る」(ローマ 6:16)。わたしたちは自分自身に対して仕える方法ではなく、神のみ旨を行う方法を学ばなければならない。キリストは、彼の栄光を捨て、その神性のうえに人性をまとわれた。このお方は、悲しみの人で、苦悩を知っておられた。わたしたちのためにキリストは貧しくなられた。それは、わたしたちがこのお方の貧しさを通して富む者にされるためであった。それでいながらなお、天の側においてこれほど大きな愛が表された後にも、わたしたちは、わずかばかりの、すぐにも過ぎ去る宝を差し出すことに気が進まないのである。キリストはわたしたちに永遠の富を提示してこられたが、この世の大半の者は、この世における少額の財産を得るために彼らの魂を売ってしまう。(バプトル・エー 1889年2月15日)

もし、わたしたちが本当に神の僕であるならば、神の律法に従うかそれとも一時的な利益を求めるかについて、迷うことはない。(レビュ・アツド・ハルド 1876年9月21日)

今の比較的平穏な時代において、真理の信仰者が自分の信仰により支えられていないならば、重大なテストが来て、獣の像を拝まず、額や手に刻印を受けない者に対して法令が発布されるとき、何が彼らを支えることができるだろうか。この厳粛なる時代は、そう遠くはない。弱く、優柔不断な者になるのではなく、神の民は、悩みの時代のための力と勇気を蓄えなければならない。(レビュ・アツド・ハルド 1876年9月21日)

黄金律の力

「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。」(マタイ 7:12)

世の人々がキリストに従うと公言する人々を見て批判することが多いことを、わたしたちがみな覚えていればよいのだが。現世の事柄におけるわたしたちの方針や、お互いに対するわたしたちの行為は、鋭く、かつ厳しいコメントを受けている。わたしたちの教会で何を言うかは、わたしたちの家庭や隣人における態度ほどは重要ではない。優しい言葉、思慮深い行為、本当の礼儀正しさやもてなしは、常にキリスト教にとって良い影響をもたらす。わたしたちのだれに関しても次のような証が担われることのないようにしよう。「宗教は、彼らを少しも良くしなかった。彼らは、以前と同様、自己放縦で、世俗的で、商売に抜け目がない」。そのような実を結ぶ者たちは、キリストと共に集めるものではなく、むしろキリストから散らす者である。彼らは、一貫したふるまいによってキリストへと導くことができたはずの人々の前に、障害をおいてしまう。クリスチャンとして偉大な律法に従っているという明白な証拠を世に示すことは、わたしたちの義務である。「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」(マタイ 19:19)。(サィズ・オブ・タイムズ 1882年1月12日)

黄金律の標準はキリスト教の真の標準である。これに達しないものはみなにせ物である。……

キリストの名をとる人々が黄金律の原則を実行する時、使徒時代に見られたと同じ力が福音に伴うであろう。(祝福の山 170, 171)

自我は、手ごわい独裁者である。自我がわたしたちの生活を支配すると、わたしたちは、他の人々に対して自分にしてほしいと思うことをすることができなくなる。黄金律を実現するためには、生活が変えられなければならない、人性が神性にあずからなければならない。……

神にとって価値があるのは、話す言葉や告白の内容、あるいは敬虔や信仰深さの主張ではない。そうではなく、キリストのような品性を表す義のわざである。神の律法に従うということは、わたしたちの隣人の必要を素早く見つけたうえで、素早く助けること、すなわち立ち止まって「わたしたちが信じている原則を彼らが信じているか」と尋ねることをしないで、素早く助けることである。神の律法に従うということは、苦しんでいる人類の必要を満たす神の御手のように行動すること、それらの人々がどのような宗教を信じているかに関わらず、そうすることである。この働きをし、また神の真理の諸原則に忠実である人々は、生ける福音である。(ビュー・アソド・ハラルド 1908年4月9日)

2月17日

偽預言者たちは広い道を教える

「命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。……このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである。」(マタイ 7:14, 15, 20)

どの時代においても、偽預言者はキリスト教に対する最も危険な敵であった。自分が真理の擁護者だと主張し、人類同胞の魂のために重大な責任を負っていると告白する人々が現れてきた。しかし、彼らは誤った教理を教え、真理をゆがめめる。彼らが示す精神や彼らの働きは、彼らの宗教の性質を証する。そのような人々は過去に現れてきたし、今も現れており、わたしたちの時代に現れ続けるであろう。彼らは他の者を批判し、裁き、またいつも論争をしたがり、かつ真理に抵抗する。彼らは、聖書について誤った解釈をする。彼らは真理を擁護する人々の言葉を誤ったかたちで伝える。そして彼らの言うことを聞いて霊的な識別力をもたない人は、このような偽の教師の言葉によって誤って導かれる。……

キリストを知っていると公言するが、「行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者、また不従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である」人々が多くいる(テトス 1:16)。「彼らは、あなたがたの愛餐に加わるが、それを汚し、無遠慮に宴会に同席して、自分の腹を肥やしている。彼らは、いわば、風に吹きまわされる水なき雲、実らない枯れ果てて、抜き捨てられた秋の木」(ユダ 12)。素晴らしい演説をしたり、耳ざわりの良いことを話しつつ、偽の預言をする者が数多くいる。彼らは口が上手く、素晴らしい内容の演説をするが、だからといって、彼らを実条件に受け入れてよいわけではない。話すことは簡単である。重要なのは、どのような聖潔に至る果実を結んでいるかである。木の性質を示すのは、その実である。口には出すが、それを実際には実行しない者は、見せかけの葉は立派だが、実を結ばない不毛な木と同じである。偽善者に対して下される制裁には、憐れみが混じらない。キリストを知っていると告白しつつ、言動においてはキリストを否定する人々は、金になりますますが、神の御目にはやかましい鐘や騒がしい鐃鉢のようである。福音を信じると告白することにより、偽善者たちは人々の信頼を獲得するかもしれない。しかし、キリストの言われたことを実行するのであれば、狭い門へ入って、主に贖われた者たちが歩むために敷かれた道、すなわち地から天へ導く唯一の道へ入ることはない。(サインズ・オブ・タイムズ^{*} 1892年7月18日)。

本物の信仰の実例

「百卒長は……言った、『主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいて、ひとりの者に「行け」と言えば行き、ほかの者に「こい」と言えばきますし、また、僕に「これをせよ」と言えば、してくれるのです』。イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、『よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。』（マタイ 8:8-10）

キリストが来て、自分の僕を癒すことを望んだ百卒長は、イエスを自分の屋根の下に招く資格がないと感じた。しかし、彼の信仰は非常に強かったため、彼はイエスにただ言葉を述べて下さるよう嘆願した。そうすれば、癒しのわががなされるのであった。「イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、『よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』。それからイエスは百卒長に「行け、あなたの信じたとおりになるように」と言われた。すると、ちょうどその時に、僕はいやされた」（マタイ 8:10-13）。

この時、イエスは、疑いと対照的に信仰を賞賛しておられる。イエスは、イスラエルの子らの側でのつまずきの原因を示しておられる。彼らの不信は、光を拒絶することにつながり、ひいては彼らの有罪宣告と破滅に至るのであった。（*ザイン・オブ・タイムズ* 1886年12月30日）

この百卒長は、イエスにどのような力が備わっていると考えただろうか。彼は、それが神の力であることを知っていた。……百卒長は、神の御使たちがイエスととりかこんでいることを信仰の眼によって見た。そして彼は、イエスのみ言葉を受けた御使が病人のところへ行くことを見た。彼は、イエスのみ言葉がその部屋に入ることにより、彼の僕が癒されることを知っていた。そしてキリストは、この人の信仰をどれほど賞賛されたことであろう！……

わたしたちの民以外に、神から与えられた光をすべて受け入れて実行したことにより、神の好意を受けている人々が数多くいる。……長年にわたり、わたしたちは人々に、来て、キリストの義に関する光と真理を受け入れるよう訴えてきたが、彼らは、来てその貴重な真理をつかむべきかがわからない。彼らは、彼ら自身の考え方にしばられている。彼らは、救い主が入ることを許さない。……わたしたちは立ち上がり、不信心の立場から抜け出すべきではないだろうか？わたしたちは、サタンを自分たちの足の下で砕くべきではないだろうか。わたしはあなたに嘆願する、生ける水が流れる場所に来なさい。（*ビュー・アンド・ヘルド* 1890年3月11日）

2月19日

自分たちの言葉を見張っている

「善人はよい倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から悪い物を取り出す。あなたがたに言うが、審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである。」(マタイ 12:35-37)

ことばは心のうちにあるものを示す。「おおよそ、心からあふれることを、口が語るものである」(マタイ 12:34)。しかしことばは、品性をあらわすだけではない。ことばは品性に作用する力を持っている。人は自分自身のことばに影響される。サタンにそそのかされ、一時の感情にかられて、彼らは、ねたみや悪い臆測などを口にし、本当に信じてもないことを口にする。だが口に出したことばは考え方に作用する。彼らは自分のことばにだまされ、サタンにそそのかされて語ったことを事実として信ずるようになる。一度意見や決心を口に出してしまうと、面目にこだわってそれをひっこめることができないことが多く、あくまで自分が正しいことを証明しようとし、ついには自分が正しいのだと信ずるようになる。疑いのことばを口に出すことは危険である。すなわち天来の光を疑ったり批判したりすることは危険である。不注意で不敬な批判をする習慣は品性に作用し、不敬と不信の念を助長する。この習慣をほしのままにしていた多くの人々が、危険を意識しないで続けているうちに、ついには聖霊の働きを批判したりこぼんだりするようになった。(各時代の希望中巻 40)

若者や年老いた者たちの前に、常に争闘と闘いがある。彼らは一瞬たりとも眠ってはならない。ずる賢い敵は、彼らを混乱させ、打ち負かすために常に準備をしている。現代の真理を信じる者たちは、彼らの敵と同じくらいよく見張り、またサタンを拒絶することにおいて知恵を表さなければならない。彼らは、これを行うだろうか。彼らはこの闘いにおいてあきらめないであろうか。彼らは注意深く、全ての悪から離れるだろうか。キリストが多くの方法によって否定されている。わたしたちは、真理に反対する言葉を述べたり、他の者の悪口を言ったり、愚かな会話や冗談を言ったり、また無駄な言葉を発することによりキリストを拒むかもしれない。これらにより、わたしたちは、ほとんど賢さや知恵を表すことがない。わたしたちは、自分自身を弱くさせている。わたしたちの努力は、力強い敵に対抗するには不十分であるため、負けてしまう。警戒を欠くことにより、わたしたちはキリストがわたしたちの中に入らないことを告白してしまっている。……なぜわたしたちは、わたしたちの主の敵たちと友になることを希望し、彼らの習慣に従い、彼らの意見に導かれることを希望するのだろうか。完全かつ無条件で神に服従し、世に対する愛と地上の物を捨てて、向きを変えなければならない。そうしなければ、わたしたちはキリストの弟子になることはできない。(教会への証 1巻 408)

魂をなおざりにすることに気をつけなさい!

「汚れた霊が人から出ると、休み場を求めて水の無い所を歩きまわりますが、見つからない。そこで、出てきた元の家に帰ろうと言って帰って見ると、その家はあいていて、そうじがしてある上、飾りつけがしてあった。そこでまた出て行って、自分以上に悪い他の七つの霊と一緒に引き連れてきて中にはいり、そこに住み込む。そうすると、その人ののちの状態は初めよりもっと悪くなるのである。」(マタイ 12:43-45)

今日と同じように、キリストの時代にも、サタンの支配力が一時たれたようにみえた人々がたくさんいた。神の恵みによって、彼らはこれまで自分の魂を支配していた悪霊から解放された。彼らは神の愛をよこんだ。だが譬にある石地の聞き手のように、彼らは神の愛のうちにとどまっていなかった。彼らは心の中にキリストに住んでいただくように日々自分自身を神にまかせなかった。そこで悪霊が「自分以上に悪い他の七つの霊」をつれもどってきたとき、彼らは悪の力に全面的に支配された(マタイ 12:45)。

魂がキリストに屈服するとき、新しい力が新しい心を占領する。人が自分自身ではなしとげることのできない変化が行われる。それは超自然の働きであって、人の性質に超自然の要素をもたらす。キリストに屈服した魂はキリストご自身のとりでとなり、キリストはそれをそむいた世の中に保たれる。キリストは其中でご自身の権威よりほかの権威がみとめられないように望まれる。このように天の勢力によって占領された魂はサタンの攻撃に攻め落されることがない。しかしわれわれは、キリストの支配に服していないときに、悪魔に支配される。われわれはこの世の主権を争っている二大勢力のどちらかに必然的に支配されるのである。暗黒の王国の支配にはいるためには、わざわざその国の奉仕をえらぶ必要はない。光の王国と同盟することをおこたりさえすればよいのである。もしわれわれが天の勢力と協力しなければ、サタンは心を占領してそこを永住の地とする。悪に対する唯一の防備は、キリストの義を信じる信仰によって、心のうちにキリストに内住していただくことである。神とのいのちのつながりをもたないかぎり、われわれは、利己主義、放縦、罪への誘惑などのけがれた影響に抵抗することは決してできない。われわれは、多くの悪い習慣をやめ、しばらくの間はサタンとのまじわりをたちきっているかも知れない。だが時々刻々に神に献身することによって、神とのいのちのつながりを持っているのでなければ、われわれは打ち負かされてしまう。(各時代の希望中巻 41, 42)

2月21日

わたしたちの真の親戚

「天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。」(マタイ 12:50)

キリストは決して、ご自分の母親や兄弟たちに対して表敬に欠けることはなかった。しかし、……このお方はそこにいるある人々がご自分の言葉を受け入れて、その道をとることにより、父親や母親は親戚からの断固とした反対を受けることになることをご存じであった。……

父なる神への服従は、親子間の服従であるとキリストは言われる。これは、天の家族の一員になるすべての人々とわたしとの間の一致のきずななのである。真理の言葉を受け入れるすべての人々は、すべての信徒を兄弟、姉妹また母親として結びつける聖なる輪の中に入るのである。(レビュー・アンド・ハールド 1899年9月26日)

もし彼らがイエスを天からくだられたおかたとして信じ、イエスと協力して神のみわざをなしたのだったら、この地上の肉親関係はどんなにかキリストの支えとなっていたことだろう。彼らの不信はイエスの地上生涯に暗い影を投げた。それは、イエスがわれわれのために飲みほされたあの苦悩のさかずきのにがの一部分であった。

神のみ子は、福音に対する敵意が人の心に燃えあがってきたのを鋭く感じられたが、それを家庭において感ずることは特に苦痛であった。それはイエスご自身の心が親切と愛に満ち、家族の者の間におけるやさしい心づかいを高く評価しておられたからである。イエスの兄弟たちは、イエスが彼らの考えに譲歩されるように望んだが、そのような行動をとることは、イエスの天来の使命と全然一致しないのであった。彼らは、イエスが自分たちの助言を必要とおられると考えた。彼らは、人間的な見地からイエスを判断し、もしイエスが律法学者たちとパリサイ人たちに受け入れられるようなことだけを語られたら、彼のみことばから引き起される不愉快な論争が避けられると思った。……

兄弟たちの短いはかりなわでは、イエスが果すためにおいでになった使命をはかることができなかった。したがって彼らは、こころみのうちにあられるイエスに同情することができなかった。彼らの下品で、物事のわからないことばは、彼らがイエスの品性を真に認識していないこと、したがって神性が人性にまじりあっていることをみとめていないことをあらわした。彼らは、イエスが悲しみに満たされおられるのをよくみかけた。だが彼らの精神とことばは、イエスを慰めるどころか、かえってその心を傷つけた。イエスの感じやすい性質は苦しめられ、イエスの動機は誤解され、その働きは理解されなかった。(各時代の希望中巻 43, 44)

もし、わたしたちが神のみ旨を行うならば、わたしたちは自分たちの主の兄弟、姉妹とみなされる。わたしたちは日々、このことを覚えていなければならない。わたしたちは、神と調和していなければならないが、サタンには敵対しなければならない。あまりにも暗黒の君との親睦がありすぎる。(レビュー・アンド・ハールド 1888年8月7日)

2月22日

保証されている休息

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ 11:28-30)

あなたの平穏や休息を奪う恐れや不安を(イエス)はとり除いて下さる。しかし、あなたはイエスの許へ来て、あなたの心の密かな苦しみをイエスに告げなければならぬ。(ビュー・アソド・ハルド 1881年8月2日)

イエスは、疲れていて重荷を負っている者にご自分の許へ来るならば休息が与えられることを約束して、彼らを招いておられる。彼らを富の奴隷にしてしまう自我と食欲のくびきを、イエスのくびきと交換することをイエスは提案しておられる。そして、そのくびきは負いやすく、その荷は軽いとこのお方は宣言しておられる。……

イエスは、彼らが世における心配事や不安という重荷を脇へ置き、ご自分のくびきを負うように望んでおられる。このくびきとは、自己否定と他の人々のための犠牲である。この荷は軽いことがわかるであろう。キリストが提供しておられる休息を拒み、いらだたせるような利己心というくびきを負い続け、利己的な満足のために金銭を積み上げる計画の中で自分の魂に極限まで苛酷な負担をかける人々は、キリストのくびきを負うことや、キリストが彼らのために負ってくださった自己否定と無我の慈善という重荷を持ち上げることに見出される平安と休息を経験したことがない。(同上 1874年8月25日)

キリストは、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と言われる(マタイ 11:28)。あなたが身に着けている罪や悪意のくびきよりも、キリストのくびきの方がどれほど軽いことであろう。継続的にあなたを苦しめ、批判する良心よりも、どれほど軽いことであろう。良心を犯すのは耐えがたいことである。これら全てのものよりもキリストのくびきの方が、どれほど負いやすいことであろう!

問題は、柔和が欠けているということである。へりくだりがないのである。わたしたちは、まっすぐ福音の単純さの許へ来ようとしなさい。わたしたちは、他の人々から敬意を受けたいと願う。わたしたちは、モーセのように、神の民と共に虐待されることを望まない。わたしたちは汚名を着せられることを望まない。そして、全天は、わたしたちが地上の感化力を打ち砕いて、不朽の価値がある事柄に目を留めるよう招いているが、それにもかかわらず、わたしたちは地上の泡に目を留め続けるのである。わたしたちは、自分の愛情が高められることを望んでいない。わたしたちは、地を這うつるのようであり、そのつるは無意味な切り株に巻き付く。わたしたちのつるが、神の御座に巻き付くようにしなさい。(ビュー・アソド・ハルド 1870年4月19日)

2月23日

「静まれ、黙れ」

「すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。ところが、イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、『先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか』と言った。イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、『静まれ、黙れ』と言われると、風はやんで、大なぎになった。」(マルコ 4:37-39)

イエスが目をさまして嵐に応じられたとき、彼は平安そのものであった。そのことばにも顔つきにも恐怖の跡はみられなかった。イエスの心の中には恐怖がなかったのである。しかしイエスは、ご自分が大能の力を持っておられることをあてにされなかった。イエスが静かに落ちついておられたのは、天と地と海の主としてではなかった。イエスはその大能の力をさしおいて、「わたしは、自分からは何事もすることができない」と言われる(ヨハネ 5:30)。彼は天父の力に信頼された。イエスが安心しておられたのは、信仰、すなわち神の愛と守りに対する信仰のゆえであった。嵐を静めたみことばの力は神の力であった。

イエスが信仰によって天父の守りに安んじておられたように、われわれも救い主の守りに安心していことができる。もし弟子たちがイエスに信頼していたら、彼らは平安のうちに守られたのである。彼らは危険な時に恐れたことによって、不信仰をばくろした。自分を救おうと努力しているうちにイエスを忘れたのである。彼らが自分にたよることに絶望してイエスに助けを求めたときにはじめて、イエスは彼らに助けを与えることがおできになった。

弟子たちの経験がそのままわれわれの経験である場合がどんなに多いことだろう。誘惑の嵐が迫り、はげしいなづまがひらめき、波がわれわれの上におおいかぶさるとき、われわれは助けてくださることのできるおかたがおられることを忘れて、自分ひとりで嵐と戦う。望みが失われていまも滅びそうになるまで、われわれは自分自身の力にたよる。そしてそれからイエスのことを思い出す。救ってくださいとイエスに呼び求めるとき、その叫びは無駄にならない。イエスは、われわれの不信と自信を悲しく思っただけで責められるが、必要な助けをお与えにならないことは決してない。陸の上でも、海の上でも、心のうちに救い主を持っているなら、恐れる必要はない。救い主に対する生きた信仰によって、人生の海はおだやかになり、主が最善とごらんになる方法で、われわれは危険から救われるのである……

罪はわれわれの平安を破壊してしまった。自我を征服しないかぎり平安はない。人間の力では、心の中の支配的な欲情を制することができない。弟子たちが荒れ狂う嵐を静めることができなかつたように、われわれはこの点において、無力である。だがガリラヤの大波に平安を語られたおかたは、どの魂にも平安のことばを語ってこられた。どんなに嵐がはげしくても、イエスに向かって「主よ、助けてください」との叫びをあげる者には救いがある。(各時代の希望中巻 59-61)

レギオンに対する勝利

「イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供をしたいと〔自分の救い主に〕願い出た。しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、『あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい。』（マルコ 5:18, 19）

人類が、強力に増幅する罪の働きを通して、空中の権をもつ君によって悪魔に取りつかれたようになり、目ざましい悪の行為に甚大な力を発揮しているのを、キリストはご覧になった。しかし、キリストはまた、サタンに対抗し、打ち負かすのを見た。「今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう」（ヨハネ 12:31）。もし、人類がキリストを信じるならば、彼らはレギオンと呼ばれる墮落した天使たちの万軍に対抗する力が与えられることをキリストはご覧になった。キリストは、ご自分が捧げようとしている驚くべき犠牲によってこの世の君が追い出され、男女が神の恵みを通して、失ったものを取り戻す場所に置かれるという考えによってご自身の魂を強くされた。（ビュー・アズ・ワルド 1904年11月24日）

利己心とは、レギオンと呼ばれる悪魔である。どの時代においても、この悪魔はキリストと自己犠牲の精神をこの世から追い出してきたように思われた。その影響により教会は力を発揮すべきときに弱くなってしまった。……

失われたこの世を破滅から救うために、イエスは何をしてこられただろうか。イエスは、墮落した世を救済するために天使をお遣わしにならなかった。しかし、わたしたちのためにこのお方は「悲しみの人」となられ、「病を知っていた」（イザヤ 53:3）。キリストの愛はどれほど深く、どれほど広く、またどれほど完全なことであろうか！このお方は、ご自分の無限の犠牲によって人々を救う計画をお立てになった。カルバリーの十字架は人にとって、キリストの利益と彼らの利益が同一であることに関する説得力のある論拠となるべきである。……

そこで、キリストがご自分のものだと呼ばれる人々、キリストがそのために多大な犠牲を払われた人々は、何一つ利己的に楽しむことはしないし、できないのである。彼らの利益は、彼らの救い主の利益と一つである。（バイル・エー 1894年2月12日）

デカポリスの地域にイエスが最初に送った伝道者は、イエスによって悪魔のレギオンを追い出してもらった人であった。その人は、イエスについていきたいと懇願した。しかし、イエスは「お許しにならないで、彼に言われた、『あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい。』（マルコ 5:19）。この人は、自分自身の身に、イエスが真のメシヤであられるという証拠を担っていた。彼は自分自身の体験を語り、神が彼のためにどんなに大きなことをしてくださったかを告げた。（サイン・オブ・タイムズ 1891年10月12日）

2月25日

命を与える信仰

「ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまったが、だれにもなおしてもらえなかった女がいた。この女が〔イエスの〕うしろから近寄ってみ衣のふさにさわったところ、その長血がたちまち止まってしまった。イエスは言われた、『わたしにさわったのは、だれか』。……女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったことを、みんなの前で話した。そこでイエスが女に言われた、『娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。』」（ルカ 8:43-45, 47, 48）。

宗教的な事柄を無頓着に話し、本当の魂の飢えや生きた信仰もなく霊的な祝福を求めて祈ることに、ほとんど意味がない。キリストのまわりでひしめきあっていた群衆は、キリストとの接触から何の活力も感じなかった。しかし、哀れな苦しむ女が、非常な困窮の中で、手を伸ばし、イエスの衣のふちをさわったとき、彼女は癒しの力を感じた。それは、信仰による接触であった。キリストはその接触を認識し、そこで最後の時代に至るまでご自分のすべての弟子たちのために教訓を与えようと決心された。彼は、彼から力が出ていったことをご存じて、群衆の中で振り向いて次のように言われた。

「わたしの着物にさわったのはだれか」。そのような質問に驚いて、このお方の弟子たちは答えた、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」（マルコ 5:30, 31）。

イエスは、その接触をした女に目を留められた。彼女は恐れおののいた。彼女の喜びは非常に大きかった。しかし、彼女は自分の分を越えてしまったのであろうか。自分のうちで何がなされたのかを知って、震えながら来て、イエスの足元へひざまずき、真実を全て話した。キリストは彼女を非難されなかった。このお方は優しく言われた、「安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」（マルコ 5:34）。

ここでは無頓着な接触と信仰による接触が区別されている。神を信じる生きた信仰を働かせることのない祈りと説教は無益である。しかし、信仰による接触は、わたしたちに力と知恵の聖なる宝庫を開き、こうして、土の器を通じて、神はご自分の恵みのふしぎを成し遂げられるのである。

今日、この生きた信仰を、わたしたちは大いに必要としている。わたしたちは、イエスが本当にわたしたちのものであること、またイエスの霊がわたしたちの心を純粋にし、精錬することを知らなければならない。もしキリストに従う人々が本当の信仰を、柔和さと愛と共にもっているならば、彼らはなんとという働きをなしとげることであろう！（ビュー・アヴ・ヘルド 1887年12月13日）

その女に……キリストの衣のふさをさわらせたのは、生きた信仰であった。これこそ、わたしたちがもたなければならない信仰である。そして、その信仰をもつとき、わたしたちは試練や争いを口に失くなる。なぜなら、それらすべてを通して、わたしたちは言い表せないほどの喜びと完全な栄光を得るからである。（サイズ・オブ・タイム 1889年9月30日）

2月26日

70人の使命

「その後、主は別に七十二人(70人)を選び、行こうとしておられたすべての町や村へ、ふたりずつ先におつかわしになった。そのとき、彼らに言われた、『収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい。』」(ルカ 10:1, 2)

イエスの偉大な愛の心は、あらゆる国籍の人々に命の言葉を伝えたいという願いで満たされ、彼はそれを大規模に実施された。このお方は、多くの人々が行き交う大通りに身を置き、数多くの人々の集まりの前で宣布された。しかし、このお方は伝道の働きのために、数多くの伝道地が開かれつつあることをご覧になった。十二弟子が働くための機会は非常に数多くあり、また彼らだけでなく、非常に多くの働き人のために機会が沢山あった。イエスは、伝道の働きに携わるために、より多くの人々を教育された。……

このお方が彼らを送り出されたとき、彼らに伝えられた指示は、十二使徒に伝えられたのと同じであった。「自分の持ち物を売って施しなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に尽きることのない宝をたくわえなさい」(ルカ 12:33)。彼らは自分たちの財産を保持して、それらを布にくるみ、地に隠しておいてはならなかった。主は、彼らにお与えになったタラントを用い、闇の中に座っている魂に真理の光をさらに伝えることにおいて、金銭、思い、あるいは感化といったすべての能力を用いることによって、それらを両替人に渡すことを望んでおられた。(サインズ・オブ・タイムズ 1894年12月10日)

使徒たちは、神の王国について伝道するだけでなく、病人を癒し、また来たるべき「偉大な医者」が来られるための準備をすべきであった。彼らは、このお方の神聖な性質について宣言すべきであり、またこのお方こそメシヤであることを宣言し、このお方の働きと使命を公に伝えることにより、人々の心に興味を引き起こすのであった。

彼らはだれにも道であいさつすることを禁じられていた。彼らは論争のために道を開くことになる形式的なあいさつに入るべきではなかった。……〔キリストは〕彼らを空手で送り出し、彼らが出会う人々の善意に頼るようになされた。使徒たちは、自分たちのつつましい出身を決して隠したりすべきではなかった。彼らの人々と交わるとき、彼らは彼らの食卓に共に座し、彼らを招く人々と共に行き、身分や地位には注意を向けるべきではなかった。彼らの唯一の目的は、聴衆の国籍や性質にかかわらず、福音をあらゆる人々に伝えることであった。(同上 1896年6月25日)

2月27日

時の緊急性

「また弟子のひとりが言った、『主よ、まず、父を葬りに行かせて下さい』。イエスは彼に言われた、『わたしに従ってきなさい。そして、その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい。』」(マタイ 8:21, 22)

全世界よりも一つの魂にはもっと価値がある。そのため、一時的な性質の事柄が、わたしたちと魂を救う働きの間に入り込むことは、天の神にとって不快なことである。……わたしたちは、自分たちに委ねられた働きの重要性をまだほとんど認識していない。……

魂が真理に従うか、真理に反するかを判断しようとしているときに、あなたに懇願するが、自分の働く場所から引き離されることがあってはならない。それを敵に明け渡してはならない。あえて言うが、たとえあなたの家に死人がいたとしてもである。キリストは、「わたしに従ってきなさい。そして、その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい」と言われ(マタイ 8:22)。

キリストは次の言葉を述べたとき、あることを意味しておられた。「おおよそわたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍をも受け、また永遠の生命を受け継ぐだろう。」(マタイ 19:29)。このお方はわたしたちが永遠の事柄を第一の重要事項としなければならないこと、また自ら神のみ事業とみ働きに関わり、一時的な性質の事柄によってわたしたちが妨害されてはならないという事実を印象づけようとした。この性質のものはすべて、二義的なものとしなければならない。神の武具は、一度着たら、取るに足らない言い訳のために脱いではならない。

今わたしたちに必要なのは、倦むことのない精力と辛抱強さであり、こうして、困難や家庭における心配事によって、わたしたちの働きから離れることがなくなる。もしわたしたちの関心がこのように離れることを許してしまうと、わたしたちの敵はそれを察知し、わたしたちをその働きから引き離すために、わたしたちの家庭の真ただ中において問題を生じさせる。しかし、もしわたしたちが神の働き人としての立場に固く立ち、次のように「主はわたしたちにメッセージを与えられた。であるから、わたしたちが自分の義務の立場について、何としてもこの働きをやり遂げないかぎり、忠実な見張り人となることはできない」と言うならば、わたしたちは神の天使たちがわたしたちの家に来て家族に仕え、敵に対し「立ち退きなさい」と言うのを見出すであろう。わたしたちが携わっている働きは偉大な厳粛なものであり、もしわたしたちが神に完全に頼ることを学ぶなら、わたしたちがその働きを実行するにあたり、神はわたしたちを助けて下さる。……

ある人々は、一時的な事柄を決して彼らと神の働きとの間においてはならないと主張してきた。そして彼らはこのために多くのものを失った。しかし、それが何であろうか。永遠の事柄と比べれば一時的な事柄など何であろうか。わたしたちは、主の軍隊に入ったのである。そうであれば、今、だれ一人として持ち場を離れなければならないような事態を生じさせないようにしよう。(ヒストリカル・スケッチ・オブ・SDA ミッション 127, 128)

2月28日

迫害の下で証言する

「そして、人々があなたがたを連れて行って引きわたすとき、何を言おうかと、前もって心配するな。その場合、自分に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。また兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう。また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」(マルコ 13:11-13)

あなたは、勤勉な聖書の探求によって得た知識を、まさに必要としているタイミングで、神があなたの記憶にひらめかせてくださることに驚くには及ばない。しかし、もしあなたがこの恩恵期間の貴重な時をやりすごし、あなたとあなたの子供の記憶の中に真理の宝石を満すことを怠るなら、もしあなたがキリストの言葉に親しむことをしないなら、もしあなたが試練においてキリストの恵みの力を試したことが一度もないならば、あなたは聖霊がキリストの言葉をあなたの記憶によみがえらせることを期待することはできない。わたしたちは、分かたれていない愛情をもって日々、神に仕え、それから神に信頼しなければならぬ。……

あなたは、まさに猶予期間の終わりまでキリストを自分と共に連れなければならぬ。そして、他の人があなたの王冠をとることを許してはならない。あなたは、神の栄光にのみ目を向け、パウロのように立ちあがり、神は、神に信頼してお委ねしたものをかの日に至るまで守ってくださる力を有しておられることを信じなければならぬ。神がご自分に委ねられたものを守ってくださると信じることによって、わたしたちはわたしたちの主なる救い主イエス・キリストに信頼を示すのである。しかし、あなたが現在なすべきことをあなたが理解することをわたしたちは望んでいる。あなたは、神の栄光のみに目を向けなければならぬ。現代においては、あまりに語るが多く、あまりに祈りが少なすぎる。わたしたちは、自分が知っており、理解していると思っている事柄を話すべき以上に非常に多く話している。なぜなら、わたしたちの知識は表面的なものにすぎないからである。わたしたちは、もっと謙遜にわたしたちの救い主に信頼し、信用しなければならぬ。わたしたちは、キリストの単純さを持つべきである。わたしたちは自分たちの命がキリストと共に神のうちに隠されることによって、キリストのようになりたいのである。……

わたしたちは、最後の時代において試練がくることを知っている。わたしたちは、それ以外の事柄を求めている。しかし、試練が来たときに耐えられるように、そして迫害の下で弱ることがないように、神がわたしたちに恵みを与えて下さるように。その時にわたしたちが何の力もないような立場にいることは望んでいない。そうであれば、今、神を親しく知ろうではないか。(ビュー・アソッド・ハルッド 1890年4月15日)

研究 14

清めの特別な働き



4. このお方に栄光を帰せよ

この特別な清めのメッセージは、黙示録 14 章の中でさらに明瞭に示されています。このメッセージを伝える御使は、すべての人に伝えるべき「永遠の福音」、すなわち「神の義」をたずさえてきました。この神の義を受けることこそ、真の清めの働きです。これを与えるために、この御使がまず伝えたのは、「神をおそれ」ることでした。ここから清めの働きが始まります。そして続くメッセージは、「神に栄光を帰せよ」（黙示録 14:7）です。

このお方に栄光を帰せよ

栄光を帰すようにとありますが、「栄光」とは何を意味するのでしょうか。聖書辞典によれば、次の意味になります。

栄光 (1391do,xadoxa) 意味 :1) :新約聖書では、いつもだれかに関する良い意見、ひいては賛美、誉、そして栄光という結果になるものを意味する。

この神にふさわしい栄光を帰せよ、とのメッセージですが、わたしたちは、「人は、自分が見たことも持ったこともないものを与えることはできない」という事実を覚える必要があります。そこで、「罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなって」いる人間のために、神は、その大いなる憐れみと愛のうちに、ご自分の栄光をわたしたちが見ることができるよう、御子をつかわしてくださいました。

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた」（ヨハネ 1:14）。

その結果を、使徒ヨハネは次のようにあかししました。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手

でさわったもの、すなわち、いのちの言について—このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである—すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである」(ヨハネ第一 1:1-3)。

ヨハネは、その栄光を直接見て、その栄光にあずかり、さらに人々も招くにいたしました。

では、実際どのように、その御父の栄光が見えたのかを、み言葉から見てみましょう。

父のひとり子としての栄光

「わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光(威光、輝き)であって」(ヨハネ 1:14)。

「神性が苦難の人性をとおしてひらめいた」(各時代の希望上巻 145)。

「一瞬間、キリストの人としての姿に神性がひらめいた」(各時代の希望下巻 201)。

「イエスはご自身の生涯において神のご品性を例証するためにこの世に来られた。そして、このお方はサタンが作り出した誤解を一掃し、神の栄光を表された。このお方は、人々の間に住むことによるのみ、ご自分の天父の憐れみ、同情、そして愛を表すことができるのであった。なぜなら、このお方が神の恵みを明らかにすることができるのは、慈善の行為によるのみだからであった。人の不信は根深かったが、彼らはこのお方の神のような模範と、このお方の愛と真理の行為の証に抵抗することはできなかった」(神のむすこ娘たち 139)。

「わたしたちはキリストのご品性のより高く、より明確な見解を持つ必要がある。それがこのお方の模範を模倣するよう導くのである。わたしたちは、何が純粹で宗教的な生活を構成するかをより理解する必要がある。わたしたちは気質と品性においてキリストのようになることを学ばなければならない。わたしたちは神のみ約束を信じる信仰を増し加えなければならない。このお方はわたしたちに大いなる尊い恩寵を示してこられた。このお方はわたしたちにご自分の栄光、ことごとく愛に満ち、聖なるものを表してこられた。これらの特質は正義と憐れみが混じっている」(ビュー・アソド・ワルド 1887年4月5日)。

実際にこのお方のうちに宿っている栄光は隠しきれものではありませんでした。「神性がひらめいた」。そして、「人の不信は根深かった」にもかかわらず、「こ

のお方の……証に抵抗することはできなかつた」。見続ける者は、必ず受けるものになります。ですから、わたしたちは「キリストのご品性のより高く、より明確な見解を持つ必要があら」ります。そのために、イエスは来られたのです。

イエスは神のご品性を世に例証するために来られた

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であつて、めぐみとまこととに満ちていた」(ヨハネ 1:14)。

ここにある「宿る」という言葉は、原語で〔(4637) skhno,wskenoo(skayno'-o)] 自分の幕屋を固定すること、自分の幕屋を持つことを意味します。

「神は、イスラエル人について、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」とモーセに命じられた(出エジプト記 25:8)。……そのように、キリストはわれわれ人間の陣営のまん中にご自分の幕屋をお建てになった。キリストはわれわれのうちに住み、わたしたちがご自分のきよい品性と生活によく親しむように、人間の天幕のそばにご自分の天幕を張られた」(各時代の希望上巻 7,8)。

「主は彼の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず、父の罪を子に報い、子の子に報いて、三、四代におよぼす者。』」(出エジプト記 34:6,7)。

「イエスはわれわれを神のご性質にあずかる者とするためにおいでになったのである。われわれが信仰によってキリストにつながっているかぎり、罪はわれらの上に権をとることはできない。神はわれわれが品性の完全に到達できるように、われらの中にある信仰の手を求め、それをみちびいてキリストの神性をしっかり把握させていただきるのである」(各時代の希望上巻 135)。

このお方が、わたしたちのうちに宿ってくださったのは、まさに旧約時代にご自分の幕屋を建てるようお命じになったのと同じように、めぐみとまこととに満ちたご自分の栄光に「親しむ」ため、すなわち、その栄光に「あずかる」ためでした。栄光を帰すためには、その前に栄光にあずかる必要がありますが、ただそれは動くことのない幕屋でイエスと共に宿るときのみ、可能なのです。このため、始めから、すなわち「栄光を受けられなく」なった時から、神はわたしたちにご自分の栄光にあずかることができる備えをしてくださいました。アダムの時に戻ってみましょう。

エデンからエデンへ

「神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた」(創世記 3:24)。

ここで、言われた「置いて」という言葉も、原語では、[7931 shakan (shaw-kan')], 起源は「宿る」という概念から来ています。すなわち、宿る、住む、置く、とどまる、などです。始めから、このお方はわたしたちがご自分の栄光を見ることができるよう、わたしたちのところに来て、宿ってくださいました。

「また、彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」(出エジプト記 25:8)。

「キリストの栄光は幕屋において、また神殿において、贖罪所の上の聖なるシェキナーの中に宿っていた。キリストは、彼らのために、彼の愛と忍耐の富を絶えずあらわしておられた」(国と指導者(「主のぶどう畑 4))。

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」(ヨハネ 1:14)。

しかし、この地上では、神の栄光そのままに見ることはできません。「主の栄光を鏡に映すように見」るだけです。ヨハネは、この最終的な成就を見ました。

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして」(黙示録 21:3)。

「ヨハネは聖なる幻の中でこれを見て言った、「御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして』(黙示録 21:3)。ああ、なんと祝福された望み、栄光に満ちた展望であろう!」(手紙 62,1886 年)。

「『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして』。これは神を愛するすべての人への良き知らせである。……この世の生涯において神のことを考え、語ることに喜びを持たない人々は、来るべき生涯、すなわち神が常にご臨在され、神の民の間で暮らす生涯を楽しむことはない。しかし、神のことを考えることを愛する人々は、自分のいるべき環境に身を置き、天の大気を呼吸するようになる。地上において天の思想を愛する人々は、その聖なる交わりと楽しみの中で、幸せになるのである」(ビュー・アソッド・ハルド 1890 年 5 月 13 日)。

黙示録 14 章の御使は、これを全地の人々に知らせしているのです。

わたしたちは、このメッセージを受けて、どのようにそれにあずかることができるでしょうか？

「十人のらい病人が癒されたとき、一人だけがイエスを見つけるために戻ってきて、このお方に栄光を帰した。わたしたちは神の憐れみによって心に触れられることのなかった考えることをしない九人のようにならないようにしましょう」（教会への証5巻315）。

「キリストの忠実さについてわれわれが告白することは、キリストを世にあらわすために天のえらばれた方法である。われわれは、昔の聖人たちを通して知らされた神の恩恵を告白すべきであるが、しかし最も効果があるのは、われわれ自身の経験によるあかしである。神の力の働きを自分自身のうちにあらわすとき、われわれは、神の証人である。各個人はそれぞれ他人とちがった人生を持っており、また本質的に他人とちがった経験を持っている。神は、われわれの賛美が、それぞれ特有の個性を帯びてみとにのぼることをお望みになる。このようなとうい告白によって神の恵みの栄光を賛美することは、それがクリスチャン生活によって裏づけられるとき、抵抗することのできない力をもって魂の救いのために働くのである。

十人のらい病人がいやしを求めてイエスのところへやってきたとき、イエスは、彼らに、行って祭司に見せなさいとお命じになった。彼らは途中できよめられたが、イエスを賛美するためにもどってきたのは、その中の一人だけだった。ほかの者たちは自分をいやして下さったおかたを忘れて、そのまま行ってしまった。いまでもこれと同じことをしている者がどんなに多いことだろう！」（各時代の希望中巻75,76）。

「主はこう言われる、『知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあつて、わたしを知っていること、わたしが主であつて、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる。』」（エレミヤ9:23-24）。

このように、受けた恵み、すなわち完全な清めを感謝することによって神に栄光を帰すのです。

そしてさらに、ますます暗黒が濃くなるこの時代に、もう一つの方法によって、神に栄光を帰し、世を明るくすることが求められています。

このお方のご品性を擁護することによって栄光を帰す

「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである」（コリント第一10:31）。

「そのように、あなたがたの光(ヨハネ1:4-10)を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるように

しなさい」(マタイ 5:16)。

「神の戒めを守ることは、わたしたちに良い行い、自己否定、自己犠牲、そして他の人々の益のためへの献身を要求する。わたしたちの良い行いだけがわたしたちを救うことができるのではないが、たしかに良い行いなしに救われることはできない。……キリストがわたしたちの義、わたしたちの喜びの冠となって下さらなければならない」(教会への証 3 卷 526)。

この栄光を実際に人々が見なければなりません。しかし、それがどのように可能でしょうか。

「女のすえの残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り {tay-reh'-o}、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」(黙示録 12:17 英語訳)。

「ここに、神の戒めを守り {tay-reh'-o}、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」(黙示録 14:12 英語訳)。

ここで言われている、「守る」という言葉は、[5083:{tay-reh'-o}] という言葉で、注意を払う、気をつける、1a) 守るという意味です。

「イエス・キリストは律法の栄光であられる。……モーセが、「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示ください」と祈ったとき(出エジプト記 33:18)、……モーセに神のご品性が表された。

律法には、無限の神のご品性の一つ一つの詳細がある。

天の律法はいつも、他の人々に憐れみ深く、親切で、優しく、助けとなり、引き上げるものである。

足の下に踏まれている神の律法が、民の前に高められなければならない。……」(信仰によってわたしは生きる 84)。

「アベルは、……神の公平と恵み(ご品性)を弁護した」(人類のあけぼの上 卷 70)。

神のご品性の完全な写しである律法の詳細を一つ一つに注意を払い、大切に守ると共に、その律法を踏みにじる世の前で、神のご品性を擁護することによって、神に栄光を帰すのです。はじめの殉教者もこうして神に栄光を帰したのです。

この栄光を見たいと心から願ったモーセは、人としてもっと大きな願い、「神の栄光を見せてください」との祈りを捧げました。そのとき、

「主は言われた、『わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ』」(出

エジプト記 33:19)。

『主よ、栄光をわれらにではなく、われらにではなく、あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、ただ、み名にのみ帰してください』(詩篇 115:1)。イスラエルの救いの歌にみなぎっていたのはこのような精神であった。この精神が神を愛し、恐れるすべての人々の心の中になければならない。神は、われわれの魂を罪の束縛から解放することによって、紅海でヘブル人にお与えになったものよりはるかに大いなる解放をもたらしてくださるのである。……われわれが神のみ手から受ける日ごとの祝福と、なにもにもましてわれわれに幸福と、天国とを得られるようにしてくださったイエスの死は、われわれの絶えまない感謝の主題でなければならない。神は、われわれをご自身に結びつけ、神のたいせつな宝物としてくださり、なんと大きなあわれみと、たぐいえない愛をわれわれ失われた罪人に示されたことであろう。われわれが神の子とよばれるために、なんとという大きな犠牲が贖い主によって払われたことであろう。われわれは大いなる贖罪の計画の中で、われわれに与えられる祝福に満ちた望みを思つて神をたたえなければならない。われわれは、天の遺産と神の豊かな約束が与えられていることを考えて、神をたたえなければならない。イエスがわれわれのために生きてとりなしをしてくださることをたたえなければならない。

『感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる』と創造主は言われた(詩篇 50:23)。天の全住民は一つになって神を賛美している。われわれが彼らの輝く列につらなるときにそれを歌えるように、今、天使の歌を学ぼう。詩篇記者と共に言おう。「わたしは生けるかぎり主をほめたたえ、ながらえる間は、わが神をほめうたおう」(詩篇 146:2)。『神よ、民らにあなたをほめたたえさせ、もろもろの民にあなたをほめたたえさせてください』(詩篇 67:5) (人類のあけぼの上巻 332,333)。

わたしたちは、この地上において神の栄光を見始める必要があります。それを実際に見て、感謝を表現するとき、天の住民と共に、神を賛美し、栄光に帰す準備ができます。

「何が信仰による義認なのか。それは人の栄光をちに伏させ、人が自分の力では自分のためにできないことをすることである。人が自分自身の無価値さを認めるとき、キリストの義で覆われる準備ができる」(信仰によってわたしは生きる 111)。

真に神に栄光を帰すこと—これこそ、信仰による義認であることを知るので。

のお方はあたかも世界中にほかの人が一人もいないかのように、一人ひとりをかえりみてくださいます。

羊飼いは自分の羊の前に行き、そしてすべての危険に対応するのです。彼は野の獣や強盗と対決しました。時には羊飼いは自分の群れを守っているうちに殺されることもありました。

同じように、救い主は弟子たちの群れを守っておられます。このお方はわたしたちの前に行かれました。このお方はわたしたちが生きるように、この世に生きられました。このお方は子供であり、青年であり、成人であられました。このお方はサタンと彼の誘惑すべてに打ち勝たれました。そのようにわたしたちも打ち勝つことができるためです。

このお方はわたしたちを救うために死なれました。このお方は今天におられるけれども、わたしたちを一瞬間もお忘れになりません。このお方はすべての羊を安全に守ってください。このお方に従う者は、一人も大いなる敵によって奪い去られることはありません。

この羊飼いは100匹の羊を持っているかもしれませんが、しかし、1匹が失われたとき、彼は囲いにいる羊と共にとどまってはいませんでした。彼は失われた1匹を探しに行きました。

暗い夜のなか外に出て、嵐の中を、山や谷を越えて、彼は行くのでした。彼は羊を見つけるまで休むことをしません。

そして彼は羊を自分の腕の中に抱き、囲いへかたいで連れ帰ります。彼は長く困難な搜索(そうさく)に不平を言うのではなく、喜んで言いました。

「わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから」(ルカ 15:4-7)。

同じように、救い主なる羊飼いの保護は、囲いの中にいるものたちだけのためではありません。このお方は「人の子は、滅びる者(失われている者)を救うためにきたのである」(マタイ 18:11)と言われます。

白菜のキムチ

白菜	1 個分
水	2 リットル
塩	400 グラム

(100 グラムは上にかけて、300 グラムは水に溶かす)

パプリカ	1 個
小ねぎ	1 束
たまねぎ	1/2 個
大根	1/3 本
にんにく	2 片
しょうが	1 片

作り方

白菜を 6 等分にする。洗い、300 グラムの塩を入れた塩水に入れる。上には、残りの 100 グラムの塩をかける。水がかぶるようにする。一晩そのままおく。パプリカ、玉ねぎ、大根は千切りにして、小ねぎは 3 センチくらいに切る。にんにくとしょうがはミキサーにかける。

白菜以外のものを一つに混ぜ合わせて、白菜をつけた塩水をドレッシングのようにして、サラダのように味をつける (大さじ 2, 3 スプーンくらいですが、加減してください)。

残りの白菜の塩水は捨てる。

白菜の外側を中心に、味をつけた野菜を挟み込んでいき、そのまま一晩おきます。

翌日から、2 週間くらい食べられます。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教：11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱13号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

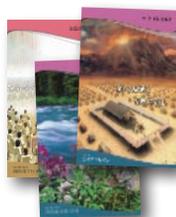


書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第23話 良い羊飼いの(1)

遵守=守り、従うこと

救い主はご自身については羊飼いと、また弟子たちについてはご自分の群れとしてお語りになりました。このお方は「わたしは良い羊飼いであって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている」と言われました(ヨハネ10:14)。

キリストはまもなくご自分の弟子たちから離れていこうとしておられました。ですから、彼らに慰めを与えるために、こう言われたのでした。このお方がもはや彼らと共におられなくなるとき、彼らはこのお方の言葉を思い出すのでした。

彼らが自分の群れを見守っている羊飼いを見るときはいつでも、自分たちに対する救い主の愛と保護を思うのでした。

その国では、羊飼いは夜も昼も自分の群れと共にいました。岩の丘をこえ、森を通って彼は、日中羊たちを川辺にある気持ちの良い草原へと導きました。

一晩中彼は羊たちを見守り、しばしば近くに潜んでいる野生の獣や強盗から羊たちを守っていました。

やさしく彼は弱いものや病弱なものを世話しました。小さな子羊を彼は自分の腕に抱き、自分の胸の中で運びました。

どんなに群れが大きくても、羊飼いはすべての羊を知っています。彼はそれぞれに名前をつけて、そしておのおのをその名前で呼ぶのでした。



同じように天の羊飼いでられるキリストは、世界中に散らされているご自分の群れの世話をなさいます。このお方はわたしたちをみな、名をもって知っておられます。このお方はわたしたちが住んでいる家、そこに住む一人ひとりの名前をご存じです。こ